

(6) 第6分科会 PTA
ア 実践報告

<報告1>

PTAとして同和・人権・平和学習の
取組を進めよう

— みんなが安心して
行事を楽しめるように —

所 属 自由が丘小学校 PTA

I はじめに

今年度は、COVID-19の影響により、年度当初の休校から始まり、年間行事も中止や縮小を余儀なくされ、PTAとしての活動も制限せざるを得ない状況となった。そのような状況の中でも、PTAとして、子どもたちのために何かできることはないかと、とても頭を悩ます日々が続いた。

自由が丘小学校では、例年実施している運動会の代替行事として、今年度は「スポーツフェスティバル」と称した行事を実施することとなった。そこで、この行事において、子どもたちが安心して取り組めるように、「電子ピストル」の使用をPTAとして依頼したところ、学校側から快諾をいただき、一部種目において、「電子ピストル」を使用させていただくこととなった。

「電子ピストル」とは、従来の紙雷管(火薬)の代わりに合成された電子音をスピーカーから出してスタートの合図として用いる器具である。電子ピストルの先にエレクトロニックフラッシュが組み込まれ閃光を放つタイプもあり、視覚的にもスタート合図が分かりやすくなっているものもある。近年オリンピックなどの世界大会でも取り入れられている。



電子ピストル

II 具体的な取組

(1) きっかけ

過去に、スターターピストルの破裂音に対して不安を抱いている様子がある児童がいたことや、破裂音曝露を受けやすいスターターや付近にいる人物の聴覚保護、聴覚的な違和感を抱いているという感想を聞いたことがあったことが、取組むきっかけとなった。

(2) 電子ピストルの利点

電子ピストルの利点として、以下の点が挙げられる。

- ・火薬を使わないので破裂音が出ない。
- ・スピーカーから音を出すので音の調整幅が広い。
- ・フラッシュ付きのものもあり、視覚的に認識しやすい。

(3) 取組の実際

スポーツフェスティバルの中では、リレーや徒競走など児童が運動場全体的に広がらない種目のスタート合図として使用していただいた。

実際に使用していただいた先生方やスポーツフェスティバルに参加した児童の感想として、「音を調整することができるので便利であった」、「音が気にならなかった」などの意見があった。

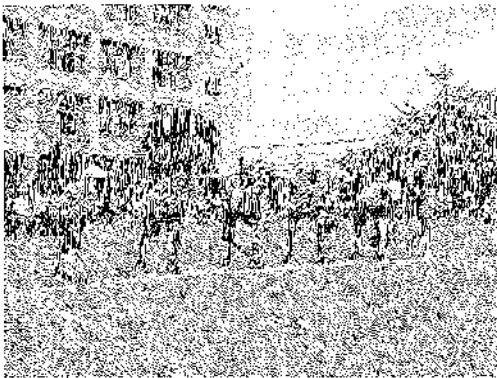
また、他の意見として、「電子式なので、故障が不安である」「運動場全体を使用するプログラムでは、聞こえない可能性があるので不安だ」、「紙雷管のような乾いた音がしないので大きな声援の中で聞こえるのか」といった課題を指摘するものもあった。

(4) 成果と課題

私の印象として、先ほど利点でもあったように、電子ピストルは、火薬を使わないので、破裂音が出ないことやスピーカーから音が出るので場面や児童一人一人にあった音の調整が可能だが、児童や先生方にとって聴覚的な保護や安心

が大きいのではないかと感じた。

今後の課題として、大きな歓声の中で運動場全体に広がって行く騎馬戦や綱引きなどのプログラムに対しての導入方法を検討していく必要がある。まず、「電子式なので、故障が不安である」という感想に対しては、電子ピストルを複数個導入していくことで解決できると考えられる。「運動場全体を使用するプログラムでは、聞こえない可能性があるのが不安だ」、「紙雷管のような乾いた音がしないので大きな声援の中で聞こえるのか」という課題に対しては、スピーカーを複数使用し全体的に配置していくことやサイズや出力を大きくすることで、運動場全体を使用した騒がしい状況においても、聴覚的な情報が確保できるのではないかと考えられる。



スポーツフェスティバルの様子

Ⅲ おわりに

今回は、聴覚的なアプローチの話であったが、視覚的なアプローチや学習的なアプローチなど、子ども一人一人の特性に寄り添った支援や前もった予防などが、今以上に充実していくことや、電子ピストルを導

入していただいたこの取組が、今後も末永く続いていくことを切望する。

Ⅳ 実践報告者からの質問

スターターピストルの破裂音曝露を受けやすいスターターや付近にいる人物の聴覚保護を考え、電子ピストルを取り入れていただきましたが、他にどんな方法がありますか。

<報告2>

同和・人権・平和学習の取組 — 三木中学校PTAの取組 —

所 属 三木中学校 PTA

I はじめに

本校は、三木市の中心部に位置する生徒数383名12学級（1年生4学級、2年生4学級、3年生3学級、特別支援学級（知的）1学級）の中規模校で、子どもたちは3つの小学校からそれぞれ進学しています。

地域の実態としては、金物が全国的に有名な地場産業が盛んで、保護者の方にも本校の卒業生が多くおられます。一方、生活環境や価値観が多様化してきており、学校教育全般に対する意識、捉え方、考え方は様々です。このような中で、人権教育・啓発や多方面にわたる子どもたちの自立支援は、保護者と学校が協力して、地域に根差す学校として、果たすべき重要な責務の一つであると考えています。

子どもたちは、一人一人の自己実現と共生をめざし、基本的な生活習慣の確立、規範意識の向上、好ましい人間関係の構築や自立性、自主性の育成などを図っていく必要があります。PTAと学校が協力して人権意識を高めていかなければいけません。またPTAには人権について学習する研修部があり、毎年講演会等を開催しています。

（人権教育目標）

- ア 学校教育全領域において心が通い合う仲間作りを進め、人権感覚を豊かにし、自立向上を促す。
- イ 人権文化創造事業との連携を進めながら、差別解消への意欲と実践力を養う。
- ウ 生命と健康を大切にし、特別支援教育の理解を促し、共に生きる心を育てる。

II 取組

I PTA人権教育講演会 (1) 令和元年度



本校では、年に一度PTAと学校が連携し、オープンスクールの日に合わせてPTA主催の人権教育講演会を行っています。

令和元年度は、「オフィス星野 トーオン高知校」の代表として全国各地で活動されている、『中山まさともさん』に来ていただき「みんなでなくそう！差別といじめ」というテーマで講演をしていただきました。

「いじめは大きな人権侵害である」が、「常に思考を前向きにすることでいじめや差別は減らすことができる」



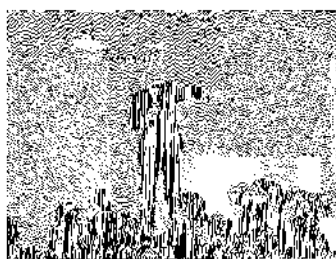
「インターネットトラブル」「古来より不変の人と人のルール」なども織り交ぜ、いじめの愚かさについて自分の経験談をもとに分かりやすく話をしていただき、子どもたちも真剣に話に聞き入っていました。

【生徒の感想】

- ・私は、物事を前向きに考えるということがまずないので、意識してみようかなと思いました。人によって考え方が違うけれど、人や物を傷つけるような人が減れば、いじめとか人間関係のトラブルは少しずつなくなっていくのだろうなと思いました。
- ・いじめをなくそうと誰もが思うことができたなら、多少いじめは減ると思います。でもそれだけではあまり変わりません。まずは自分を見直すことが必要だと思います。やさしさや思いやりをもって、相手に接することができたり、人に認められなかったとしても、自分の思いや夢を諦めずに自分でやり遂げられれば、自分の人生が充実すると思います。

(2) 令和2年度

別所中学校元校長、春川政信先生に『「みんなが笑顔になるために」～人権問題への気づきと行動～』というテーマ



で、「部落差別」「差別やいじめをなくす生き方」「コロナ差別をなくす5つの方法」「コロナ対応から生まれた感謝・協力・絆」「中学生コロナに負けない10か条」等について講演していただきました。子どもたちは、身近に多くの人権課題があることに気づき、「前向きに課題に取り組む姿勢が大切だ」ということを学ぶことができました。

また出席された保護者の方々にも熱心に聞いていただき、それぞれが人権について学習を深めることができました。

2 人権作文発表会

本年度は、コロナの関係で実施できませんでしたが、毎年、子どもたちに人権について深く考えてもらう目的で、各学年、学級において人権に関する発表を行う機会を設けています。4月の家庭訪問の期間中、授業で、人権標語、人権ポスター、人権作文の指導を副担任の先生方にしてもらっています。発表会では、子どもたちは発表者の話を真剣に聞き、感想も熱心に書いてきました。発表会には保護者の方々にも出席していただき、人権について親子で考える機会としています。また人権作文・人権標語は保護者からも募集し、発表会後には、標語は夏休みまで学校廊下に掲示し、三者懇談等で来校された保護者の方々にも見ていただいています。

3 「私たちの道徳」の読書感想文

本校では、5年前から子どもたちは長期休業日を利用して、道徳副読本「私たちの道徳」の中から3つの話を選んで感想文を書き、保護者の方々には子どもたちが選んだ話の中から1つを選び、感想を書いていただく取組を行っています。

日頃は、改めて人権について話し合う機

会が少ないですが、同じ教材で感想文を書くことから、人権について各家庭でも話し合う大切な機会となっています。

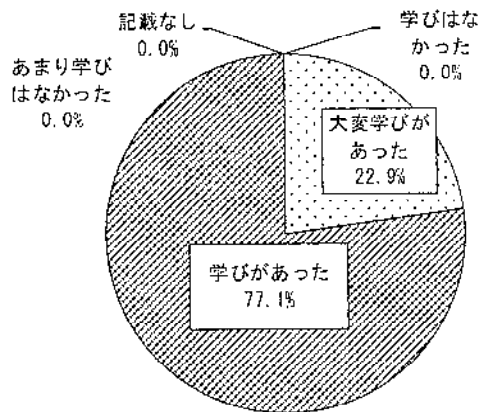
III おわりに（成果と課題、今後の課題）

毎年実施しているPTA人権教育講演会では、全校生の保護者に案内を配布し、人権について考える機会としています。しかし開催が平日の午後で、出席者が少ないという課題があることから、今後は開催日を早く設定（連絡）することや、土曜日等に開催することも検討したいと考えています。

IV 実践報告者からの質問

講演会を開催するだけではなく、どのような場を設定すれば、考えが深まるでしょうか。
<人権>

イ 学びの深度



ウ 感想

- ・「人」に寄り添うことが大切なのだと感じました。
- ・学生の頃から日々「人権」という言葉に触れ合うことで、子どもたちの小さいころからの理解は深まっていると思われませんが、実際の生活の中で対応できているかどうか、普段の生活の中での見守りが必要だと思います。
- ・コロナ社会において、実直にPTA活動の中で人権に取り組んでいただけのことに感銘を受けました。
- ・PTAのTではなくPが考えておられることが素晴らしいと思います。Tも歩み寄りより必然性のあるものを親子で一緒に考える課題の設定を共に考え活動していきたいです。
- ・全く知らなかった情報を得ました。電子ピストルを使うことによって、不安を抱く子どもも安心して行事を楽しめるという観点に気づかされました。
- ・電子ピストルを徒競走やリレーに使用するための課題をいろいろと模索されているのが素晴らしいと思いました。バリアフリーでピストル音が苦手な児童や保護者の取組は必要だと思います。
- ・運動会のスターピストルと人権が結びつくことに新たな気づきを得られました。また、読書感想文は、子どもだけでなく、保護者も取り組むことで、親子が共に考え

- るきっかけとして素晴らしいと思いました。
- ・今年はコロナ禍でPTA活動がかなり制限された年だったと思います。自由小の取組は、こういう時だからこそできた取組で、視点を変えると、聴覚障害や視覚障害の人にも対応できると思いました。
- ・電子ピストルを取り入れた実践について、紙雷管がつい当たり前だと思っていましたが、一人一人に寄り添った支援をされていました。大変勉強になりました。
- ・学校ではなくPTAが動いてピストルを変更したことはとても素晴らしいと思いました。
- ・今年度は新型コロナウイルス感染症の影響でPTA関連行事も大幅に縮小せざるを得ない状況にあったと思いますが、両校とも人権を守るという視点で活動内容等をよく検討し実践されたと思います。学校と保護者が連携してPTA活動が行われており、成果につながっていると思います。今後の参考にしたいです。
- ・電子ピストルがあるのを、初めて知りました。聴覚に不安をもっている子どももいるので大変良い取組だと思います。購入したいと思います。人権教育は人間の土台となる場所だと思います。すべての学校が一番力を入れる場所だと思います。
- ・一人一人が考えて行動することで人権問題は変わってくるのではないかと感じました。家庭や学校で教えることで幼少期から学べると思います。
- ・運動会といった学校行事や講演会等の取組の中で、人権的な視点から見直す必要性を改めて感じました。より多くの方が参加しやすく、身近なこととして取り組める工夫を考えていきたいです。
- ・自由小の発表を目にするまで、子どもの頃からの経験で「スタート音は火薬ピストル」が当然だと思っておりました。ピストル音が怖い、音に過敏なので刺激が強いと思う人が存在することにはまったく気づいておられませんでした。当たり前と思われていることで困る人がいるのではないかと考えるきっかけを与えていただきました。三木中の取組の中では特に親子での読書感想文を通じた話し合いは素晴らしいと思いました。

エ 実践報告者からの質問に対する回答

(ア) 報告1の質問に対する回答

- ・音と光による電子ピストルは聴覚／視覚ともに働きかけるので、とても良いと思いました。今回は自由が丘小学校のスポーツフェスティバルでの利用でしたが、子どもたちの徒競走などではスタート時は、下を向いているので下を向いたままでも判るような視覚的支援があると良いと思いました。
- ・個人で出場する種目を減らし、介添え人からの合図またはクラスの友だち等のタッチ等で対応するのはどうでしょう。
- ・コロナ社会において、いつどこで誰が差別するか、されるかわからなくなっています。「他人(ひと)事でない」をテーマに考える場があればいいと思います。
- ・下向きにうつ、電子ホイッスル、笛、旗、カチンコ、大きな旗を振り下ろす、ホイッスルと手を振り下ろす動作併用などの提案がありました。
- ・ピストル音が苦手な低学年などのスタートなどに適用できるかなと思いました。
- ・五輪陸上でもスターターピストルは使われなくなっているようです(使用されなくなった理由は音の伝達スピードがレーン毎に違うためと思いますが)。聴覚過敏の子は、誰もが分からないところで恐怖を抱えていることと思います。プロスポーツにおいても電子ホイッスルが使用されているようですし、運動会で音が聞きづらいのであれば、スタート時は静かにするルールを作ってはどうか。別途、聴覚過敏を知らせるウサギマークの浸透に取り組むことで新たな人権学習ができると思います。
- ・聴覚過敏の中学生がスターターピストルに苦しみ続けたという記事を読んだことがあります。笛に代えてほしいとずっと訴えていたようです。電子ピストルはとても良い方法だと思います。

(イ) 報告2の質問に対する回答

- ・(地域などは伏せて) 実際にあった事例の紹介などがあると身近に感じやすいのではないかと思います。また、行政のスマートフォンアプリなどを通じて通知するのも良いと思います。
- ・人権・差別については、人の心の気づきが大事だと考えます。講演等に参加したものの、実際の生活で活用できているかどうか、ビデオの開設や〇×クイズなど、本人が考え、理解を深め、日常の中に気づきを体験していくことが必要ではないかと思います。
- ・講演会以外の手法としては、保護者と子どもが混じったグループワークが良いと思いますが、限られた時間の中では難しいと思います。アンケートを取り、講演会の話の中で、自分の心に刻み込もうと思った事を「書き出してもらおう」ことで意識づけができるのではないかと思います。
- ・考えを深めるには、学ぼうとする意識と学習する機会が必要だと思いますが、最近思うのは、保護者同士がコミュニケーションを図り、新たな人間関係を築くことが不足しているような気がするので、そのあたりがなんとかなれば良いと思います。
- ・講演会は、どうしても全員が受け身の形になってしまいます。「私たちの道徳」の読書感想文の取組を1つの教材に絞って、親子で感想を語り合う参加型の人権学習会にしてはどうでしょうか？(長期休業中に読んだ感想を2学期のオープンスクールの日話してもらおうなど)
- ・講演会の出席者を増やすことは、どの学校のPTA行事でも苦勞している点だと思います。このような状況を作っている原因は、その場所に行かなければ参加できないという点です。リモートで参加できる場があればどうかなと思ったりします。
- ・聞くだけではなく、交流や体験活動を通じて認識を深めることができます。
- ・1つのテーマについて、パネルディスカッションなどはいかがでしょう。
- ・少人数や分散して、あるいはオンライン

での対話が必要だと考えます。

- ・中学生という思春期にあえて親子で一緒に考える取組をしてはどうかと思いました。
- ・子どもの人権の授業を保護者参加型にし、子どもと一緒に人権について考えるのが一番効果的だと思います。
- ・私自身も講演会の保護者の参加率が低いのが悩みの種でした。学校行事にはなりますが小学校では親子人権学習を行う学校が多いです。子が親から学び、親も子から気づかされることがあり、また参加率も高く、毎年有意義であったと感じています。
- ・あるテーマを基にアンケート形式で意見交換する方法があります。テーマは、身近なことから学力・進路や生徒の悩み、保護者の思いなど自宅で講演会に参加できるメリットがあります。
- ・目の前にある課題、もしくは過去にあった課題に対してなら、具体的に議論でき、身近に感じるができるかもしれないと思います。(プライバシーへの配慮が難しいと思いますが)
- ・講演会や子どもの人権作文発表の後に、小グループに分かれて感想を含めて意見交換をする場を設けてはどうでしょうか。一方的に聞くだけの講演会ではなく、互いの思いを伝えあうのは良い学習になるはずです。そこにアドバイザー的な立場で人権教育・啓発専門員等を配置されればなお良いと思います。
- ・保護者同士でも生徒同士でも、自分の経験したことを話し合える場、意見交換をするような場を設けるのもいいかなと思います。
- ・DVD等の動画媒体で教材を配布してもらえれば、自分の都合の良い時間に視聴ができ、もう一度聴きたいところがあっても何回でも戻って聞けるので、考えが深まり記憶にも残ると思います。
- ・PTA向け(大人、保護者向けの)の読み物資料の配布なども効果があるかもしれないと思います。
- ・ゲームなどイベント形式で開催すると多

くの人が参加でき意識づけられるのではないかと思います。

オ 指導助言

まず両校のPTAに対して、コロナ禍の中、学校と連携しながら人権にかかわる支援活動や学習活動に工夫して取り組んでおられることに敬意を表し感謝申し上げます。

自由が丘小学校PTAは、子どもたちが学校で安心して活動できる環境づくりをどのように支援しているかの報告です。運動会の代替行事として開催することになった「スポーツフェスティバル」で、爆裂音の出る「スターターピストル」ではなく「電子ピストル」の使用を提案し、学校の理解と協力のもと実現したというものです。大事なことは、子どもの置かれている状況と気持ちに寄り添うこと、けっして強要しないということです。「電子ピストル」は、何より子どもたちの聴覚の保護と恐怖や不安の解消に役立ち、まさに人権や健康・安全に配慮した環境用具の一つと考えられ、学校現場での使用拡大が望まれます。近年、発達特性による感覚過敏の児童生徒も増えており、このような物的環境の整備とともに、方法や場の工夫と刺激量の調整など、個の状況に応じた対応や配慮、説明が一層求められています。また、学校によっては外国籍児童生徒や外国にルーツをもつ児童生徒も増えています。すでにAI通訳機や通訳アプリを活用している学校もありますが、コミュニケーションや「心の安定」のための具体的な支援策や日本語指導の充実がより重要な課題となっています。

質問と回答について、「電子ピストル」とは別の刺激を減らす方法として、「電子ホイッスル」の使用、声や手で合図を送る方法等を採用している学校や園所があります。また、障がい者スポーツの分野では、光刺激による合図や触覚刺激による合図などが

工夫改良されていますが、さまざまな分野において誰もが使いやすいユニバーサルデザインにしていく試みがより一層求められます。

三木中学校PTAは、研修部組織が中心となり生徒や保護者・教師向けに毎年企画実施している人権教育講演会、さらに生徒と一緒に保護者も取り組んでいる人権作文発表会（本年度は実施できず）などの報告です。コロナ禍の本年度にあっても、講師に三同教副会長の春川政信さんを迎え、「密」に配慮しながら講演会を開催されました。部落問題をはじめ人権問題について、身近にかつ分かりやすく学ぶことができ、正しい理解や実践意欲の向上につながりました。昨年度は、「差別といじめ」をテーマに漫才師（タレント）の講師を迎え、その体験談も交えて楽しく学ぶことができました。いずれもキーワードは、課題に対して「前向きに考え行動すること」で、私たちも大いに見習っていききたいものです。

特に本年度の講演会では、新型コロナウイルス感染症に関する偏見や差別・いじめの防止という喫緊の課題を取り上げ、学習を深めたことは大変意義深いと思います。また、コロナ対応から生まれた「敬意と感謝」、「協力や絆」など、明るい話題にもふれられたとのことで、きっと子どもたちに勇気や希望も届いたことでしょう。

講演会や研修会への保護者の参加の減少や固定化については、これまでから指摘され続けてきた課題であり、どこも悩みの種です。人権尊重をめざす営みを肯定的に受容できる雰囲気や環境、風土づくりを地道に進めていくとともに、ニーズに合った内容、時間や方法等参加しやすい手立てを講じつつ持続可能な取組を模索し、参加者の裾野を広げていければと思います。

質問と回答について、考えが深まる場や方法として、講演後の振り返りや事後の生活点検、事例による学習、保護者間の交流や親子が混じった話し合いやグループワ

ーク、体験活動や参加型の学習、リモートやオンラインの対話学習、動画教材や資料の配付などの回答が寄せられていますが、いずれも参考にしたい工夫例です。

コロナ禍のなかで、私たちは、「当たり前」の日常のありがたさや「一人一人の行動」の大切さに改めて気付きました。さらに「みんな違うのが当たり前」という多様な見方や考え方を認め合い、勇気を持ってはじめの一步を踏み出していきましょう。

